



北海道の文化とその形成過程： 道南地域における儀礼の調査から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 斉藤, 祥子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00010422

北海道の文化とその形成過程

—道南地域における儀礼の調査から—

齋藤祥子

北海道教育大学函館校

社会文化情報課程文化分野・家政教育講座

Culture in Hokkaido and it's Formative Process

A Survey of the Courtesy in the South of Hokkaido

Sachiko SAITO

Hokkaido University of Education, Hakodate

Course of Information Society Education ・ Home Economics Education

Abstract

The purpose of this survey is to grasp the feature of the formative process in the wedding reception party with an entry fee, and white and black ceremonial costumes in the South of Hokkaido. The survey was made by means of questionnairing and interviewing in 1992, 1997 and 2001 including Kumaishi-cho. As a result, it was made clear that the wedding reception system with an entry fee began ca. 1960, and spread ca. 1975. As to wedding costumes, a bridegroom wore "montsuki-haori" with "hakama," and a bride wore "kuro-tomesode" with "shimada-hairstyle" until around 1950, but "kuro-tomesode" was eliminated after 1975. As to mourning costumes, It was very common that men wore white "montsuki-haori" with white "hakama," and women wore white costumes covering their head with a white cloth. Black mourning costumes began to be worn ca. 1955, and became very common ground 1965. A turning point of clothing is found around 1960 also in other southern areas of Hokkaido.

Keywords : 北海道の文化 (Culture in Hokkaido) , 儀礼 (Courtesy) , 道南地方 (South of Hokkaido) , 熊石町 (Kumaishi-cho)

1、目的

人間は、一生のうち様々な儀礼を体験していく。通過儀礼は、基本的には、個人が主体ではある為、現在のように国際化社会となり、個人の好みを取り入れ多様化した形態も現れつつある。一方で、自分の住む地域と関わりを持つ性格のものでもある為、地域の歴史や伝統から規則、マナーが形成される。そこで、北海道の儀礼とその形成のなかでも今回は、結婚式の形態の中で会費制がいつ頃、どのように成立したのか、そこで着装される儀礼服の変遷の中で婚礼と葬式で着

用されていた白い着物と黒い着物の成立過程から、対象を北海道の道南地方に絞り、北海道の文化の一側面を見ていくことを試みる。

北海道各地の調査に関する既往報告に「北海道みんぞく文化研究会」の人達による聞き取りを中心にした宮良高弘編『北海道を探る』シリーズがある。また、現代における儀礼に関する調査では、北海道新聞社生活部編『北海道の冠婚葬祭』1988年がある。しかし、何れも道南地域に絞ってまとめてはいない。

筆者は、北海道における衣生活に関しては、昭和58年以来「北海道みんぞく文化研究会」の調査に4年間加わったり、学生と共に調査を進めてはきた。平成13年度の卒業論文の指導にあたり衣服の聞き取り調査に興味を示した学生の所在地が未調査だった熊石町であったことから、結婚式の形態として会費制の成立、儀式服の色の白と黒の変遷について熊石町の現地調査を中心に、今まで研究室で積み上げてきた函館市、松前町、鹿部町等の調査の資料と『北海道を探る』を参考に儀礼服を抽出し、整理していく事にした。

北海道の文化の1つとして伝統に基づいた本州と津軽海峡を挟んで向き合う道南地域を対象にその形成過程の特徴を把握していくことが本論文の目的である。

熊石町は、道南各地が青森県等の東北出身者が多いのに対し能登半島、越後出身者が多く、熊石から乙部までの西在8か村は箱館奉行の直轄地となっていた。また繊維関係では、開拓使が明治10年大野村に養蚕場を設け、翌11年には伝習生を公募して事業の推進の基盤としたが、熊石村内でもこの養蚕に取り組むものも現れ同14年には各小学校に蚕棚を設け、児童にも体験学習させる等の普及を図った等の歴史を持っている。

また生活や衣服の歴史に関して『熊石町史』にわずかに記載されている以外調査は行われていない為、熊石町に関する調査は、今後の資料とも成りうる価値があると考えた。

2、調査方法

会員制の成立には、まず、幅広い年代層に何うことによって大まかな形成過程を把握することを目標に、平成10年、質問紙により調査を行った。函館市の湯の川老人福祉センターの60歳以上の男女、函館市立東高等学校と函館臨床福祉専門学校の父兄を対象とし合計109名を対象に昭和20年以前から昭和50年までの招待制、会費制の状況を調査し集計した。

更に、会員制の成立と共に儀礼服に関しては、平成13年に熊石町で聞き取り調査を行なった。調査対象者は、熊石町在住の明治41年生まれから昭和9年生までの男女、合計15人である。

内訳を生年・調査地区の順で記していくと男性は、6人で、大正3年生・西浜、大正6年生・熊石、大正14年生・雲石、昭和9年生・関内、昭和9年生・関内、昭和9年生・関内。女性は9人で、明治42年生・相沼、明治42年生・関内、明治41年生・西浜、大正3年生・平、大正9年生・平、大正15年生・関内、大正12年生・熊石、大正元年生・熊石、昭和7年生・関内在住の方々である。

3、結果及び考察

(1) 会費制とその形成過程

通過儀礼に関する様々な形式・しきたりは変動しにくい性質のものであり、その土地の歴史から形成されたものである。そのため各地に特徴が見られる。

本州の各地では、根強く招待制であるが、これは、新郎、新婦と双方の両親が媒酌人を立てて招待客を迎える形式であり「披露宴」と呼ばれる。例えば、愛知・岐阜地方¹²⁾においては、結婚支度の衣裳を他の人に披露する風習である「衣裳みせ」等、親が関わり、多くの費用を要する習慣が残っている。しかし、伝統や習慣上に築かれてきた形態も決して不動のものではない。そこで本州と対岸し、本州各地を母村に持つ人達で形成してきたはずの道南地域について、結婚式の形態が、なぜ会費制として、いつ頃成立したのか、その形成過程をみていく。

先に記した『北海道の冠婚葬祭』では、昭和63年春に世論調査が行われている。方法は、道内で郵送方式により20歳以上の男女594人の回答がえられた結果、北海道は会費制が主流であることが報告されている。

会費制では、形式上の主催が同僚や友人達によって行われる。彼らによって招待状が出され、本人の希望を入れた式の計画、進行等もすべてが準備される。仲間が、お金を出し合って祝ってあげるという意味で、本州での披露宴を会費制では「祝賀会」と呼ぶ。その為、一般に招待制より列席者の数が多い。

昭和18年に閣議で「戦時衣料生活簡素化実施要綱」が決まり日本中で簡素化の意識が芽生えていたが、戦争から立ち直り生活がやや豊かになってきた昭和28年11月美唄市では第2回婦人大会で、「生活改善はまず冠婚葬祭の簡素化から¹⁾」をスローガンにかかげその時の決議され結婚について金額等も提示され会費制の形成の先駆けを推測させる具体的案が作られている。こうした運動も会費制成立に関連していると考えられる。上ノ国町では、昭和51年に新生活運動に取り組んでいる。結婚式では、福祉センター利用の祝賀会が勧められている²⁾。

では、道南地域の会費制結婚式形式の成立は、いつ頃から実施されてきたのかを知る為に、平成10年に自記式質問紙により調査を行った。函館市湯の川老人福祉センターの60歳以上の男女、函館市立東高等学校と函館臨床福祉専門学校の父兄を対象とし合計109名を対象に昭和20年以前から昭和50年代までの結婚形式を調査し集計した。

調査結果は、昭和20年以前に結婚した5人の中には会費制は、いなかった。昭和20年代に結婚した10人中招待制が8人、会費制が2人。昭和30年代に結婚した8人中招待制は4人、会費制は2人、その他2人であり、この頃から会費制が取り入れられ、昭和40年代に結婚した39人中招待制は17名、会費制は21名、その他1名となり、初めて招待制よりも会費制で行った人の方が多くなっている。

昭和50年代に結婚した46人中招待制は13人、会費制は23名、その他10名という集計結果から、会費制は昭和20年代、昭和30年代から行われており、昭和40年代に普及し始め、昭和50年代は会費制が一般化していき、「その他」が10名という結果から両方に当てはまらない自由な形式も多くなってきた傾向も確認出来た。

時期についての結果は、先にあげた北海道新聞社調査の「昭和40年代前後を境に招待制から会費制へとその主流が逆転している³⁾」調査結果とほぼ同じ傾向が見られた。

職業別にみていくと会費制48名のうち、自営業、農業、漁業は、13名で、会社員、公務員が35名であり、土地に密着した職業の人の方が、招待制を続けていた。

また、着装について、婚礼衣裳は、和装か、洋装かの傾向をみていくと、両方という回答を除くと、花嫁の衣裳は、招待制では、和装は26名、洋装は3名。会費制では、和装は7名、洋装は19名であった。

また、最近出席した知人の結婚式の服装は、招待制は、和装は26名、洋装は12名。会費制は、和装は5名、洋装は32名であった。

このことから、洋装という形で会費制の衣服への合理化の方向も同時に伴っていた。

以上から、道南地方でも会費制の導入は、それほど長い歴史を持っていないことが明らかになった。そこで、会員制となっていく過程を聞き取りによって把握していく為、1地域に限った状況をみる為に、中央から離れ既述したように独自の歴史を持つ熊石町に絞っての調査を行ってみることにした。

熊石町での聞き取り調査では、調査対象者は、結婚式を熊石町で行い、配偶者のうち、生まれは、いずれかが、熊石町生まれの人を選んだ。今回の対象者の15人は結婚相手の出身地が、青森県と大阪府であった2人を除いて他は、熊石町か隣町であった。また、対象者の方々には、当時の周辺の状況についてもお聞きした。

昭和33年以前の結婚式までは全て招待制であった。聞き取り調査対象者の子どもの時代になると、式が、熊石町で行われる場合は、式場は、センターを利用し会費制で行なわれている。

熊石町では昭和43年熊石町立福祉センター、45年に関内生活改善センターなどが設立され、昭和40年代に会費制が取り入れられるようになったことが明らかになった。つまり、会費制が函館では取り入れられた昭和30年代には、熊石町では招待制で行われており会費制はまだ取り入れられてはいなかったが、函館市の調査と同じく昭和50年代には熊石町でも会費制が普及、一般化されていたことから上記の調査と同時期には成立していたことになる。

会費制の開始は、各地さまざまであるが、会費制は、センター等公共施設の設立にともない昭和50年代には、一般化されていた。

(2) 儀礼服—ハレの色から見た変遷—

明治時代初期における日本人は男女とも日常着は、前時代からの踏襲で一般には混色の地味な色調が多く使われていた。それに対してハレの日には、無彩色と共に晴れやかな有彩色が用いられている。

日本人は本来白を神格化する思想をもっていた。黒は冠位をあらわす色にもつかわれていたが、平安時代の文学作品等には忌む言葉にも使われている。

婚礼の衣裳は、神に対する誓約、祈願の意味から祭服であったことから江戸時代以前から貴族、武家等の上層階級では白は着られていたが、庶民では、地域、個人によってさまざまである。それに対して、葬式の装いは、ほぼ白か、黒である。明治44年に出された皇室の喪服の服制では、礼服、通常服、袷は黒色となり、一般には礼服は黒、または色物紋付きの模様物三枚重ねで下着は白無垢が正式とされていた。現在では黒が一般的になっているが、地方によっては和服に白の喪服が着装されている。北海道では白い着物を着た歴史を持つ。北海道の装いの歴史は、どのような形成過程をへてきたのか。形態と共に婚礼服の色と喪服の色の変遷を中心に既往研究と聞き取りにより明らかにしていく。

婚礼の装い

既述した昭和28年11月美唄市における例でも「結婚」の項で「式服は簡素で行い特に婚礼衣裳は新調しないで、借衣又は会社備え付けを利用しましょう」「参列者の服装も簡素なものにしまし

ようり」と衣服の合理化も推進されていた。道南地域では、松前町でも本町地区から離れ平成4年には、214戸という原口での状況を当時の近江町内会長からお聞きすると、「いつ頃から始まったかは、定かでないが、婦人部・婦人会で花嫁衣裳として黒留袖を購入し、1回2,000円で貸し付けていた。昭和50年頃まで続けられたが自然消滅」となり廃止されている。

道南地域の婚礼の装いを調査から表にまとめてみると表1のようになる。

表1 婚礼の装い

	熊石町	江差町	上ノ国町	福島町	松前町	函館市	戸井町
明治		一般の人は 普段着でロバタ コン		明治から大正頃 まで 一般の人は 普段着でロバタ コン			(明治40年代オ オヤケ層) 婿・嫁・普通の 着物
大正		婿・黒紋付き 嫁・銘仙の着物 島田			婿・黒紋付羽織 仙台平の袴 嫁・裾模様のある 黒紋付き メリンスの 襦袢島田		(大正から昭和 にかけてのオオ ヤケ層) 婿・黒の紋付 羽織、 仙台平の袴 黒綸子の足 袋 嫁・黒留袖又は 色紋付の重 ね着物 緞子の丸帯 (大正から昭和 にかけてのコヤ ケ層は借りる) 婿・黒の紋付 羽織、 袴 嫁・黒留袖又は 色紋付 丸帯 島田 角隠し
昭和		婿・紺で詰襟 の軍服 嫁・銘仙のよそ いきの着物 (昭和3年) 婿・木綿の縞の 着物 羽織 嫁・木綿の元禄 袖 羽織 半幅帯 (昭和5年) 婿・洋服の人も いた 嫁・黒留袖 高島田	(オオヤケ層) 婿・黒紋付き 羽織 仙台平の袴 嫁・5紋黒留袖 白の重ね丸 帯	(昭和に入っ てから) (オオヤケ層) 婿・縞や無地の 長着、黒紋 付き羽織、 仙台平の 袴、桐下駄 嫁・振袖又は黒 留袖島田、 かんざし、 (一般の人) 婿・縞の長着黒 紋付き羽織 草履、 嫁・縞の長着黒 紋付き羽織 白足袋草履		嫁・黒の紋付き 羽織	
10	婿・黒紋付き羽 織、仙台平 の袴 嫁・黒留袖	(10年11年) 婿・紋付の着物 又は縞の着 物 袴 紋付きの羽 織		(昭和10年頃か ら角隠しをす る)	婿・普通の着物 羽織、袴 嫁・普通の袂の 着物 色足袋 日本髪	(昭和10年) 婿・黒紋付き羽 織、仙台平 の袴嫁・黒 留袖 (オオヤケ層) 婿・黒紋付き羽 織、仙台平 白足袋	

	熊石町	江差町	上ノ国町	福島町	松前町	函館市	戸井町
		嫁・全体に模様のある着物 高島田 オオヤケ層では、色直しもした。 (10年以前は、角隠しなし) (17年写真) 婿・銘仙や縞の着物黒紋付き羽織 黒袴 又は黒の背広	(17年18年) 婿・国民服 嫁・縞の着物に文化帯			嫁・白い打ち掛け 白い綿帽子 婿・黒紋付き羽織、仙台平の袴 白足袋 嫁・黒留袖	嫁・裾模様の色紋付着物
20	婿・紋付き黒羽織 袴 嫁・黒留袖 紋付き羽織 角隠し	嫁・黒留袖、丸帯、高島田、角隠し (20年) 婿・軍服嫁・もんべ又は普通の着物	(20年代) 婿・黒紋付き羽織、仙台平の袴白足袋 婿・銘仙や縞の着物 紋付き羽織袴 嫁・黒留袖 島田 角隠し	(昭和20年写真) 婿・モーニング 嫁・黒留袖 島田 角隠し	婿・国民服 嫁・白打ち掛け		(昭和20年前後) 婿・軍服又は日露の制服 嫁・銘仙の着物に羽織又は上張りにもんべ
30		(30年前後) 嫁・打ち掛け 高島田 角隠し		(昭和30年) (オオヤケ層) 嫁・白い打ち掛け			
40	婿・黒紋付き羽織 仙台平の袴 背広 嫁・黒留袖 角隠し 柄入りの着物				(昭和35年) 婿・黒紋付き羽織 仙台平の袴 か洋服 嫁・白打ち掛け (昭和37年) 婿・黒紋付き羽織 仙台平の袴 か洋服 嫁・白打ち掛け		(昭和40年代) 函館のホテル、 当地の漁民の家
50	婿・黒の背広 嫁・打ち掛け、 洋服						

聞き取りの他参考とした文献 宮良高弘編 『北海道を探る 10』、『北海道を探る 15』、『北海道を探る 23』、『北海道を探る 25』、『北海道を探る 29』

式服の変遷は、上層階級であるオオヤケ層の家から見る事が出来る。函館在住の明治36年根室生、女・Sさんの聞き取りによると、両親は函館の人で家は、漁業で網元。根室で知床、ラウスに漁場を持って羽振りが良かった。にしんを肥料にしていた肥料製造業を営んでいた。自分は根室から函館に18歳の時にきた。結婚式は、函館で昭和3年、丸まげで黒の留袖を着ている。昭和10年、函館の海産商から平成14年の現在もその建物が残る豊川町海産商の家に嫁いだ女・Jさんは、綿帽子の白無垢で嫁入りしている。当時は、珍しい姿だった。

また昭和14年に函館の教員に家庭から海産商の家に嫁いだ松前町博多の大正8年生、女・Yさんの式は、自宅で行い、5つ紋のついた黒留袖を着ている。丸帯を締め、白足袋である。和裁の

仕立て専門店で仕立ててもらっている。婿は、羽二重の5つ紋の付いた黒紋付の羽織、袴は、仙台平、白足袋であった。

婚礼に関しては、オオヤケ層では、衣裳の準備に、その多くは反物を購入し、婚礼衣裳を仕立てている。また昭和27・28年頃から嫁が柄入りの着物を着用している。一方、一般の人は、昭和27年～30年の婚礼では戦後の貧しい生活の中で、婚礼衣裳は持っている人から借りたりして着装している。熊石町の調査によると、婿の婚礼衣裳は、昭和20年代までは、黒の紋付羽織、仙台平の袴が一般的で、大きな移り変わりは見られなかったが、昭和33年の婚礼で、自分の持っている黒の背広を着用した等、この頃から徐々に洋装化が始まっている。嫁の婚礼衣裳は、黒留袖で髪は島田に結うのが一般的であり、角隠しは必ずしもかぶられていなかった。

聞き取り調査での対象者の話から、一般には、黒留袖は、昭和40年頃から昭和50年頃まで着用されていたが、昭和50年以降には黒留袖は熊石町において着用されなくなっていた。

葬礼の装い

男性の装いは、白い袴や縞や無地の着物に紋付の白い羽織に白の袴が着装されていた。場所によっては、着物の襟に白い布をつける場合もあった。道南地域で葬礼の際には、笠がかぶられていたが、熊石町のように、かぶらない地域もあった。

女性の装いは、白の着物に白い布を頭に被る。対象者の言葉から「金持ちの家」では、メリンスの布を頭にかぶったという例もみられる事から、葬礼の装いにおいて、衣服は、形態が同じでも材質において階級の差があった。葬式の装いの変遷を表2にまとめる。

時期については、戦中・戦後もしばらくは葬式において“シロ”又は“イロ”と呼ばれていた白い着物が着用されており、上記の函館市の女・Sさんは、40年以前は、葬式に白いチリメンの布を被った。40年頃の大火の後で黒の喪服を皆が着るようになった記憶があるといわれる。黒の喪服が着用され始めたのは、他の資料と併せ昭和40年頃からだったといえる。

表2 葬式の装い

	熊石町	江差町	上ノ国町	福島町	松前町	函館市	戸井町
明治 大正						男・白の袴 女・白い着物	(大正から昭和にかけてオオヤケ層) 男・白い着物 白い羽織 白い袴 アミガサ、白足袋、 白い鼻緒の草履
昭和	男・紋付きの白い羽織、白の袴、着物の襟に白い	(大正頃から昭和5年頃) 男・白い着物に白い袴又は白い袴 アミガサ又はトリオイガサ 白足袋 素草鞋 女・白い着物黒帯(又は白帯)ポウシ	男・白い着物に羽織又は白袴 白足袋 わらじ すげ笠 女・対丈の白い着物、		男・白紋付羽織 白い袴 菅笠 女・普通の着物 紋のつかない羽織 ※男女とも着物の襟に幅5センチ×長さ20センチ位の白い布をつける		女・白綸子の着物・帯・高祖頭巾 又は縞の良い着物 白綸子の着

	熊石町	江差町	上ノ国町	福島町	松前町	函館市	戸井町
20	布 女・白い着物、 白の布を頭 に被るオオ ヤケ層は、 メリンスの 布を被った。 コヤケ層は、 木綿。	(四尺の白 いメリンス の頭巾) 白 足袋・白い 鼻緒の草履 子供・白い着物 を着るか、 白い布を頭 に被る。	五尺の白の 布を頭に被 る 子供・白装束 さい子は白 袴だけ。 (20年頃) 婦人会で白い着 物貸し出す。	結婚式の着物を そのまま着るこ ともあった。 (以下は戦後ま で続いている家 もあった) 男・黒つばい着 物の上に白 対丈の短い 着物・白い 紐の網笠・ 白い紙緒の 草履 女・着物の上 に白い対丈の 着物・白い 四角い布を 被る・白足 袋・草履 (後に、着物、 帯共に白)	男・白い長い着 物、白い羽 織、白い袴、 白足袋、鼻 緒の白い草 履 女・白い長い着 物、羽織、 白い帯、白 足袋、白い 鼻緒の草 履、白い布 を頭に被る	(昭和15年) 男・白い袴 女・白い着物白 布被る黒の着 物の人もい た。	物を羽織る。 (コヤケ層) 男・オオヤケと 同様 女・縞の着物の 上に白の着 物 (昭和24年以降) 次第に黒の喪服 となる。 女・黒紋付等。 その後、黒 い洋服にな る。
30	女・黒のウール の着物 黒の喪服	(昭和30年頃 から) 次第に参列者か ら黒い喪服を着 る。 37~38年頃から 黒喪服	(35・46年・写 真) 男・白い着物、 又は白い袴 女・白い対丈の 着物、白い 布を被る は、続く。 洋服の上に 白い羽織も いた。				
40							黒の喪服 男・黒又は紺の 背広 女・黒紋付きの 着物又は 黒の洋服
50			(50年以後) 男女ともに黒の 喪服				

聞き取りの他参考とした文献 宮良高弘編 『北海道を探る 10』、『北海道を探る 15』、『北海道を探る 23』、『北海道を探る 25』p 181,252、『北海道を探る 29』p222

熊石町に限っていくと調査対象者の聞き取りから、“シロ”は、昭和26・27年位まで着用され、昭和28年から黒のウールの着物を経て、昭和30年代に黒の喪服が着装されていった。

熊石町の婚礼・葬礼における洋装化は昭和30年を境に進み、昭和30年代から昭和40年代が和服から洋服への移行期間であったことが今回の調査で明らかになった。

また、熊石町と反対側の太平洋西部に位置する鹿部町³⁾では、昭和30年頃までは、身内は、白い着物で、親戚や参列者は、縞や無地の着物等の上に白い半天を着ており、30年代からは黒の喪服が着られるようになっていく。

以上から道南各地域においては昭和40年代前後が、白い喪服から黒の喪服への変換期であったことが確認できた。

4. まとめ

結婚式の形態として会費制の成立と婚礼と葬式の儀式服の白と黒の変遷について既往報告と筆

者の研究室で積み重ねてきた調査の資料から、その歴史と共に北海道の文化の1つとして道南地域における形成過程の特徴を把握していくことが本論文の目的である。

会費制の成立については、函館市と中央から離れた熊石町を見ていくと、会費制が函館市で取り入れられていた昭和30年代には、熊石町では招待制で行われており会費制はまだ取り入れられてはいなかったが、函館市の調査と同じく昭和50年代には熊石町でも会費制で行われていたことから同時期に一般化している。つまり、中央から離れている地区の場合では、新しい形態の受け入れは、遅い。しかし、その普及、一般化される時期は、とりいれの早かった地区とほぼ同時期という速度の早さがみられた。

北海道における会費制の導入は、戦後の生活物資に乏しくなった生活の中でその解決策の一つの手段として昭和30年前後、各地の新生活運動がきっかけとなって始まった。それは、新生活運動の目標の一つが、冠婚葬祭の簡素化であった事が契機となり形成されていた。

会費制がほとんどの人に知られるようになると、列席した多くの人から会費を集める事が出来る等、高価になりがちな結婚式にかかる費用が安価ですむ事から導入されている。

以上から、道南地域では、昭和50年前後に普及し一般化されてきたことが明らかになった。

地域に密着し伝統に基づいた形式を重んじる本州と、北海道の意識の違いは、着装の違いとなって表れていた。招待制の結婚式においては、本人同士の衣裳は勿論、限られた範囲の出席者の装いも以前からのしきたりを重んじても厳粛に行われる。これに対し、新しく取り入れられた会費制結婚式においては、式自体に特別重んじなければならない規則もなく、比較的自由なものである。

それらは、装いにもあらわれ、昭和50年以前の調査の結果から、招待制と比較して会費制は、洋装が多かった為、合理化の傾向も推測できた。

今日、個性化、多様化されつつある婚礼、葬式の形態は、もともとは、その土地に根付いて形成されていく性格のものである。また、そこで着装される衣服には、どのような形成過程があったのかを見ていった。

婚礼の形式については、既調査と比較して、桧山管内上ノ国町や、熊石町の隣に位置する乙部町でもみられた“ソイヨメ”は、熊石町でも行われていた。

渡島管内福島町・戸井町、桧山管内江差町・上ノ国町でも焼き場まで棺桶を担いで運んだという事例があり、白の晒を持って歩いたなど熊石町との共通点もある等、道南地方の中で共通する部分もある。こうした形態については各町村史・誌からたどる事が出来る。その上での着装についての歴史も共通する部分も有る。その形成過程をみていった。

婚礼の装いは、婿は、昭和20年代まで、黒の紋付羽織、仙台平の袴が一般的で、オオヤケ層もコヤケ層ともその形態は、変らなかった。一方、嫁の婚礼衣裳は、新調した当時の日常着である縞の着物を着た時代もあった。オオヤケ層から黒留袖で髪は島田に結う事からはじまり、一般にひろがっていった。函館市のオオヤケ層の中には、昭和10年に、白の綿帽子、白無垢の着物が着装されるという例もみられたが、各地のオオヤケ層では、黒留袖も自分の家で誂えている。

一般には、大きな移り変わりは見られなかったが各地で昭和40年代にかけて黒留袖が着用されていたが、昭和50年以降には黒留袖は中央からはなれている熊石町でも着用されなくなっていた。

葬式の装いについては、昭和26・7年位まで"シロ"と呼ばれた白い着物が着用されていた。

男性の装いは、“シロ”又は“イロ”と呼ばれていた白い袴や白い紋付の羽織に白の袴が一般的で、着物の襟に白い布をつける場合もあった。笠は、かぶられていない地域とかぶられている地域があった。

女性の装いは、白の着物に白い布を頭に被るといった装いであった。衣裳の素材は綿であったが、対象者の言葉から「金持ちの家」といわれたオオヤケ層では、メリンスの布を頭にかぶったという例もみられた事から、葬礼の装いは、同じ白地の着物であっても、材質において階級の差があった。

つまり喪服においては、男女とも、各地で白い着物や布を身にまとっており、その着装形態は様々であったが、道南各地で昭和30年代から昭和40年代にかけて黒の喪服が着用されていたことが明らかになった。

以上から、本州でも会費制は、存在するが、北海道のように、広く普及し、一般化していない。今日は、冠婚葬祭の形式は、多様化の傾向が、見られるが、北海道の形成過程から全国的に広がって行きつつある先駆けの傾向を明らかにする事が出来た。

会費制と儀礼服については、卒業論文作成の為に同時に調査を行った平成5年小又洋子さん、平成10年栃掘天由希さん、平成13年新谷明子さん、熊石町の調査では、調査対象者をご紹介いただきました町役場の方々、アンケート及び聞き取り調査にご協力いただきました皆様にお礼申し上げます。

今後の課題としては、結婚式の会費制と共に独自の形態が葬式の形態と着装について今回の調査範囲に及ばなかった事。道南地域には、北海道の他地域と比較し招待制が、多い12と報告されているが、この点では、調査対象の人数が少ない為、更に深くは追求出来なかった事があげられる。

引用・参考文献

- 1) 美唄市百年史編纂委員会編『美唄市百年史 通年編』1990年 p 1202
- 2) 北海道新聞社生活部編『北海道の冠婚葬祭』北海道新聞社 1988年 p 155～156
- 3) 石田典子『北海道・鹿部町にみる衣生活文化』昭和63年度卒業論文1989
- 4) 年宮良高弘『北海道を探る10 戸井特集』北海道みんぞく文化研究会 1986年
- 5) 宮良高弘『北海道を探る15 福島特集』北海道みんぞく文化研究会 1988年
- 6) 宮良高弘編『北海道を探る25江差特集その2』北海道みんぞく文化研究会 1993年
- 7) 宮良高弘『北海道を探る29 上ノ国特集』北海道みんぞく文化研究会 1995年
- 8) 熊石町編『熊石町史』1987年
- 9) 函館市史編さん室編『函館市史 銭亀沢編』1998年
- 10) 小又洋子『北海道における衣生活—婚礼服・喪服について—』平成5年度卒業論文1993年
- 11) 斎藤祥子「ハレの服装にみる白と黒」『日本服飾学会誌13号』1994年
- 12) 阪本弘子・佐野恂子・山田令子「結婚支度に関する母親の態度と行動—愛知・岐阜地方—」『日本家政学会誌』1988年
- 13) 澤田幸子・斎藤祥子「北海道の衣服の一考察—福島町白符における明治・大正・昭和にかけ

ての聞き取り調査から一」『北海道女子短期大学研究紀要第23号』1988年

14) 新谷明子『熊石町における衣生活について—婚礼・喪礼を中心として—』平成13年度卒業論文
2001年

15) 栃掘天由希『婚礼衣裳の研究—形式の違いから見る結婚式に関する衣裳への意識—』平成10年
度卒業論文1998年